

飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

第 480 回 明日に夢を追いかける～インドネシアの可能性

2012.7.8

インド神話に登場する炎の様に光り輝き熱を発する聖獣・ガルーダ。
近年のインドネシアは、まるでこの神鳥のように世界経済を飛翔する。
インドネシアを小国と思っている人も多いだろう。実は、面積にして日本の約5倍。人口は2億4,000万人、中国、インド、米国に次ぐ世界第4位の人口大国だ。経済規模は5,140億ドルで、東南アジアでは最大。2010年のGDP(国内総生産)の伸び率予想は6%、G20領域では、中国、インドに継ぐ第3位の成長率である。
日本との関係は親密で、インドネシアに進出する日系企業数は約1,000社に及び、日本は最大の貿易相手国かつ投資国の関係にある。

このインドネシア経済を、更に詳細なレポートをする解説はたくさんあるが、今回は混乱する世界経済の主要通貨について考えてみた。いわば「ドル後の世界」である。

ユーロはもはや死に体で、実際のところドルも風前の灯火。全てがリセットされた際に「コモディティ・バスケット」による新通貨体勢になる可能性が今のところ強い。
コモディティ・バスケットとは、ドルやユーロ、円といった複数の主要通貨で構成する「バスケット(かご)」に自国通貨を連動させる制度。コモディティ・バスケットには、貴金属、天然資源、穀物を、金額換算して、ひとつのバスケットに入れる。実物資産を裏打ちとし、担保や保証物にする通貨体勢である。組み入れられた各通貨の強弱が相場の動きを相殺するため、ドルなど単一通貨に連動させるより為替相場は安定する。

インドネシアは、世界最大の石炭輸出国、世界最大の金鉱山、銅、ニッケル、スズ、天然ガス、更に、天然ゴム、パームオイル、カカオ、キャッサバ、コーヒー、米に加え、領土の3倍はあると言われる海産物等が豊富だ。もし、「コモディティ・バスケット」による新通貨体勢確立した場合、インドネシアの優位性は驚くほど高くなる。
現時点では、国際金融資本家達の思惑がまだ機能しており、一方で中央銀行を政府・国民の手に取り戻そうという動きもあるので、世界の混乱収拾後、どの様に世界が動くかは非常に難しい。でも恐らく、インドネシアが、「奇跡の躍進を果たす可能性」が極めて高いことは、誰にも否定できない一つの事実である。

インドネシアの国民は、今日でなく明日を見ている。
未来への希望を抱き、明日に向かって、懸命に夢を追いかけている。
将来に対する不安に苛(さいな)まれ、今を大切にしたい日本の国民と大きな違いがある。将来の日本を担うのは、日本人である我々の子供達、孫達でしかない。この子供達に、どんな希望を与えられるか、今を生きる我々大人達の最大の責務であろう。たとえ今は貧しくても、大きな夢さえあれば、この国の将来は大丈夫！インドネシアの子供達は、きっと、そんな気概で生きているのだろうか。
インドネシアの将来は、頗る(すこぶる)明るいかもしれない。